【328】

氏　名（本籍）	山崎史恵（埼玉県）
学位の種類	博　士（体育科学）
学位記番号	博　乙　第　1971　号
学位授与年月日	平成15年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	摂食問題を抱えた競技者の心理的背景としての身体

主　査	筑波大学助教授	博士（体育科学）	中　込　四　郎
副　査	筑波大学助教授	博士（心理学）	坂　入　洋　右
副　査	筑波大学助教授	教育学博士	清　水　　諭
副　査	筑波大学教授	保健学博士	宗　像　恒　次
副　査	筑波大学教授	医学博士	小　川　俊　樹

論文の内容の要旨

1. 論文の目的

本論文の目的は，(1) 摂食問題を抱えた競技者特有の身体の捉え方，もしくは主観的な身体経験の在り方を質問紙等によって数量的に検討する，そして (2) 摂食問題を抱えた競技者の症状変化に伴う身体の体験を事例の分析によって，質的に検討することである。この目的を達成するために6つの検討課題を設定している。

2. 論文の概要

各検討課題にそって本論文の概要を述べる。

1）競技者の摂食問題を身体経験の混乱から捉える研究の意義（検討課題1）

摂食問題の背景について先行研究を概観し，摂食障害の患者が種々の生育史上の問題から身体との関わりに深い混乱が生じている一方で，競技者においては競技活動の中にそれと類似した多くの身体経験の混乱－身体感覚の疎外感，心身の乖離，身体像の一時的な混乱など－が含まれるものと推察された。これは，競技者の摂食問題を単なる体型認識の歪みではなく，身体経験の混乱として位置づけようとする本論文の意義を裏付けるものであった。

2）競技者の食行動の類型化，および各類型における身体感覚の特徴（検討課題2）

412名の競技者を対象に「食行動質問紙」を実施し，得られた資料にクラスター分析が行われた。その結果，5つの食行動グループが同定された。摂食問題の危険性が示唆された競技者（拒食型，間食型，過食型）には，過度の食事制限，食物への統制感の喪失，満腹感などによる適切な心身の感覚の減少といった特徴が認められ，食事場面において身体感覚がかなり疎外されている特徴を確認した。

3）競技者の体重コントロールに潜む摂食問題の危険性の検討（検討課題3）

競技者226名について過去1年間の「体重変動歴」を調査し，一定の基準を設定し4つのパターンを明らかにした。そして各パターンごとに食行動の特徴を比較検討した。その結果，特に，短期変動型の者は，試合期に極めて禁欲的な食行動を強いられる反面，試合オフ期には食統制に関わる問題が生じる傾向が認

められた。さらに，本来安定した食行動に伴うはずの心身の快感覚を手がかりとした食行動のあり方がかなり犠牲になっていることも明らかとなった。

4）摂食問題を抱えた競技者の身体像の特徴（検討課題4）

ここでは先の検討課題2で類型化された対象者の身体像を中心に比較検討した。その結果，混乱した食行動を有する競技者において体型認識面での不和と同時に，身体との疎隔感や違和感を体験しやすい傾向にあることが明らかとなった。さらに，非競技者392名を対象に同種の調査資料を加え，競技者との比較検討を行った。その結果，食行動の混乱に体型認識以外の身体の経験が関与しているという傾向は，非競技者には認められず，競技者独自の背景として理解する必要があることが示唆された。

5）摂食問題への身体経験および身体像の歪みの検討（検討課題5）

摂食問題を抱えた4名のロールシャッハ・テストの資料を中心に力動的な側面（立場）からの分析を行った。その結果，身体への直面化を迫られる状況（例えば，負傷やパフォーマンスの低下，他）の中で，対象となった競技者は，自らの身体と対峙するかのような態度を強めており，自らの感覚・感情体験のあり方が制限されていたり，内的な不全感・不信感を身体へのネガティブなイメージとして投影しやすいといった特徴が確認された。そして，こうした身体への心的態度が，食事面での身体感覚の疎外感や，体重コントロールへの固執，食統制の不能といった問題へと至る一因になっていることが推察された。

6）摂食問題の解決に伴う身体経験の変容（検討課題6）

摂食問題を抱えた競技者の心理療法の面接資料を，便宜的に，心理療法に伴う症状，身体経験，同一性感覚，外界での体験といった4つの観点からそれらの変化を分析した。そこでは，クライエントが自らの身体感覚や身体経験，様々な感情をセラピストに語り，受けとめてもらうことによって，傷ついた身体像を徐々に新たな像として統合し，明確化していくプロセスが確認された。こうした主観的な身体の変化に伴って食事への受容的態度が生まれてくると同時に，自然な感情表現や周囲に対する積極的な態度・行動が可能となっていく様子が確認された。

3. 結　論

以上の検討を踏まえ，「競技者の摂食問題の心理的背景には，身体感覚の乖離や，否定的で自我違和的な身体経験・身体像が存在し，自我が自らの不安定な身体に沿うことが困難な状態にある」と結論した。

審査の結果の要旨

本論文の中でスポーツ競技者の摂食問題を身体感覚・身体像・身体経験といった「身体」に焦点をあてて検討していることは，当該の問題事象に対する新たな理解の視点となり，そして有意な知見をもたらしている。また身体に着目することによって，臨床実践（スポーツ競技者の心理療法）に役立つ基礎資料の提供ともなっている。さらに，研究主題に対して多様な研究方法（質問紙法，検査法，調査および臨床面接法）を用いて総合的なアプローチを採用していることは，本論文の水準の高さを示している。

本論のなかで研究者自身も今後の研究課題の一つとして言及していることではあるが，競技者の摂食問題は，競技文化の特徴，競技者のライフヒストリー，そしてパーソナリティなどの影響も関与していることから，こうした要因と身体経験との関連にも目を向けていく必要がある。それによって，本論文で明らかにされた知見が現場指導者の選手指導にも役立つ知見を得ることができる。さらに，より包括的な競技者の摂食問題の発症理解が得られよう。

よって，著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。